



磯田 義治

## 1

首都東遷後の京都が悲境のどん底にあった時代の京都府の政治、産業、学術の指南役は幕末の京都所司代会津侯の御袋と言われ、維新の初には一時薩藩に捕われの身ともなれた蘭学者 砲術宗、加えて回藩といえ京都の当時の新人西周の百一新論を自費出版したほどの見識と広範囲の指導力を持っていた同志社の結社人山本覚馬翁であった。

翁の周囲には同志社開校後も依然、京都と両丹その他逸材の多くがその門に出入りした事情は京都政治産業史でも知られる通りであり、従って彼らの多くが同志社の入学、卒業とは無関係に新島先生や関係宣教師の方々にまで、宗教、学術はもとろん、新産業に至るまでの広い範囲に亘る指導を受けたことも事実である。しかしそれは少数精鋭の明治中期までの事実である。原田社長を迎える前後、明治末期の私たちの在学時代に及んでは両丹人は余り多くの数でなく、特に丹後人は少数であったゆえ、合同して両丹人会を組織していた。この合同組織も、上昔、丹後は丹波から分国した落し児であり、特に私の郷里に注ぐ由良川は船井郡の観音峠に源を築して流域

三十里、満々たる水を流れて丹波の中央部まで舟を運わせていた。旧時、但馬を入れた三丹は大体出雲系で綏部を中心に聚落し、由良河港のごとき河口八町水深く、三庄太夫や干軒長者の伝説をまつまでもなく鎌倉期までは日本海、わけて対岸との交易港として大和、山城への一交通路に当たっていた。山城風土記の加茂禰神のくんだりや丹後風土記の浦島子、羽衣の原典ともみられる奈良社記等の旧記はこれを裏書きしている。丹後一の宮、籠神社や河守元伊勢の古事、四道將軍の始めにまず丹波追主命が先発した歴史は京都と三丹との重要な繋りを物語るものであろう。

## 2

両丹と同志社を語るためにはまず筆頭に第一回卒業生の亀岡人掘余太郎貞一先生を忘れてはならない。先生は文久三年に大阪城内の城代松平紀伊守俊康邸で誕生せられた。父は貞幹、母はこう、祖父は大阪城代、亀岡藩主でもあった松平氏の家老職金太夫翁である。

先生は明治八年に設立された同志社の授業を偶然の機会から垣間見、かつデビス先生の聖書講義を聴講した結果信仰に入り、新島先生から受洗して、十年に同志社入学。十三年

井爪良平、綱島佳吉、山田健三郎の三先生と共に同志社普通校卒業、さらに神学校に進まれ、特に先生の学生時代の自費伝道の苦心は今日でも多くの人々に語りつがれている。十七年、原田助先生始め十七名の級友と共に神学校卒業、長浜、彦根、四条教会等を牧され、新島先生御逝去後は先生の志のあった新潟教会の応援に赴かれ、そこに信仰を高めて後、北越の地を去り、横浜、前橋の伝道、共愛女学校の校長としても足跡を残されたが、明治三十八年春には基督教青年会の軍隊慰問使として在滿の出征軍隊を慰問した熱血の男子でもあった。四十二年秋、ハワイからの懇請により日本人独立教会の牧師として渡布し、ハワイの教化に努められたが、昭和二年同志社教会創立五十周年記念運動講師として帰朝、一時帰布、その後同志社の再三の懇請によって、同年同志社宗教主任、同志社教会牧師として帰朝し、昭和十五年老齢の故をもって同志社を辞された。この間の約十五年間の先生の活動が当時の全同志社の関係者一同に深い感銘を与え、今日まで語り継がれている堀先生のリバイバル運動である。この意味で、新島、デビス、ラーネット三先生を同志社の宗

教の開祖とすれば、堀先生こそ開眼、信仰運動においては中興開山のお一人と讃えられるべき方であり、村上愛作君の級友である酒造家太五平氏あたりを伝道師たらしめ、奥太一郎、人見次夫、小北真之助あたり多くの地方後輩に大きな感化を与え、同時に先生の活動が当時の亀岡、岡部、綾部、福知山、宮津、舞鶴の諸教会への呼び水となったことも忘れてはならない。

### 3

明治時代に函丹から同志社に学んだ者には小北真之助、奥亀太郎、井上善吉、河原林禮一郎、塩瀬十治、大橋五男、奥村一郎、田中一馬、人見次郎、山下元治、今末清一郎、磯田信之助、田井龍生、藤田方左衛門、谷嘉吉、浅田三郎、山下新三郎、明田重義、真下儀一郎、山村俊太郎、小林康三、中江和郎、松田守三、西野守衛、片岡谷雄、材方太郎、井上助、小谷勇雄、四方政治郎、阪部茂、村上弥平、池田儀一郎、村上貢、日下部幸、山下倉太郎、奥義一、黒川栄一、千葉勝衛、由良憲之助、大森精一その他の諸氏があり、なお、現在、同志社入校友、同窓学生の函丹における配置は約千六百五十名で、ます丹波

南桑三百、北桑五十、船井三百二十、何鹿百三十五、天田百五十、氷上、多紀阿郡約百三十名。丹後にあつては加佐二百七十、与謝百四十、中、竹、磯野の三郡百五十、以上の数字となっている。なおまた、同志社の創立期と明治前期に新島、山本直先生と同志社に交渉を持った函丹人には、亀岡の田中源太郎、北桑の野尻岩次郎、河原林義雄、何鹿の波多野鶴吉、高倉平兵衛、加佐の土井市兵衛、与謝の小室三吉、小室信夫その他多くの政治、実業の諸氏がある。

なおまた、堀先生ゆかりの地、亀岡城跡は今日、新興宗教の一つ大本の活動本拠となっており、教主、出口一門の内にも同志社に学んだ者は出口和明、出口聖子の両君を始め出口光平、広瀬瀧水君ら十指を屈するに足りよう。八木の阪部、綾部の高倉、由良一門、そのほか宮津の富田兄弟、舞鶴の土井氏三代、私一門のごときも今日ではその十数名が同志社の門をくぐっているが、多分最初の手引きは新島先生年譜明治二十二年のくだりに、二回も名の出ている母方の縁者小室信夫の手引きに基くものであると思つている。

(級友会専務理事)